

Title	『「聴く」ことの力 : 臨床哲学試論』合評会報告
Author(s)	鷺田, 清一
Citation	臨床哲学. 2000, 2, p. 77-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4876
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

《報告》

『「聴く」ことの手——臨床哲学試論』

合評会報告

鷲田清一

0 はじめに

1999年の夏、わたしは「臨床哲学試論」という副題をもつ『「聴く」ことの手』(TBSブリタニカ)を上梓した。さっそく秋口に、この著作はわたしたちの研究室の「臨床哲学演習」でも取り上げられ、院生、研究生らに批評・検討してもらった。それから冬にかけて、鶴見俊輔さん(「京都新聞」他、共同通信配給)・木田元さん(朝日新聞)・高橋源一郎さん(読売新聞)・今村仁司さん(信濃毎日新聞)・野家啓一さん(河北新報)・小泉義之さん(週間読書人)らに新聞紙上で書評していただく幸運に恵まれた。また「看護学雑誌」「臨床看護」などの看護系雑誌などでも医師・看護婦の方々に懇切なご批評をいただいた。そんななか、暮れの12月4日、国際高等研究所内に設置された研究プロジェクト「臨床哲学の可能性」で、研究員による合評会が開催された。参加者は、当研究会の主幹をなさっている科学哲学・言語哲学の野家啓一さんのほか、池田清彦さん(わたしたちの第1回臨床哲学シンポジウムの提題者でもある生物学者)、清水哲郎さん(『医療現場に臨む哲学』の著者で、やはり第2回臨床哲学シンポジウムの提題者である中世哲学の研究者)、川本隆史さん(わが研究会でもおなじみの現代倫理学者)、田村公江さん(フロイトの精神分析理論を研究する倫理学者)、金森修さん(バシュラールの研究者で現在は英米の科学論に取り組む科学哲学者)、小林傳治さん(科学論専攻で近年はコンセンサス会議の主要メンバーである科学哲学者)、半田結さん(児童の美術教育に取り組む研究者)、立岩真也(『私的所有論』を著した社会学者)そしてわが同僚の中岡成文さんである。

この合評会では、はじめにわたしがこの本の概要と、くわえて大阪大学における臨床哲学の取り組みについて報告した。次いで、特定質問者として野家啓一さんと田村公江さんがこの本について詳しい批評を展開してくださった。ここではこの本の概要についてのわたしの発言は省略して、この本の目次を掲載するにとどめ、かわりにそ

の後書いた《聴く》ことをめぐる随想をふたつ、再録させていただくことにする。そして特定質問のうち、当日配付された田村公江さんの文章を、ご本人の承諾を得て、次に載せさせていただくことにした。そのあと、合評会での議論について、中岡成文さんにご報告いただく。

1 『「聴く」ことの力』(目次)

第一章 試みとしての哲学

- 1 聴くという行為
- 2 哲学のモノローグ
- 3 哲学のスタイル
- 4 哲学のクライシス
- 5 哲学のオブセッション
- 6 哲学のテクスチュア
- 7 エッセイという理念
- 8 非方法の方法

第二章 だれの前で、という問題

- 1 哲学の場所
- 2 眼がかちあうということ
- 3 声のとどくということ
- 4 なにかに向かうということ

第三章 会うということ

- 1 沈黙とことばの折りあい
- 2 間がとれない
- 3 補完性
- 4 だれかに会うということ

第四章 迎え入れるということ

- 1 ある人生相談
- 2 ことばが掴む、声が響く
- 3 だれが聴くのか？
- 4 ホスピタリティについて

第五章 苦痛の苦痛

- 1 われらみな異邦人
- 2 傷つきやすさということ
- 3 祈りとしての聴取
- 4 パックという療法

第六章 ふれるとさわる

- 1 ひとの脈にふれる
- 2 ふれ の位相
- 3 「さわる」音
- 4 音響的存在としてのひと

第七章 享けるということ

- 1 享けるという経験
- 2 「時間をあげる」、あるいは無条件のプレゼンス
- 3 たがいの裏側

第八章 ホモ・パティエンス

- 1 ケアとその場
- 2 歓待の掟
- 3 homo patiens
- 4 意味ともつれあいながら、意味の彼方へ
- 5 どっちつかずと明るさと

2 聴くことをめぐるふたつの随想

I 聴くとは？

聴くといえば、だれもおそらく、耳で、と答えるだろう。聴覚は鼓膜に伝わる空気の振動を聴覚神経が脳に伝えて……と、むかし学校で習った記憶がある。しかし、聴くという行為が、耳です、ただたんに音響情報を受けるという受動的な行為だとはとても信じられない。

たとえば、数名がおなじ部屋にいてもおなじ音を聴いているとはかぎらない。どこからともなく響いてくるBGMを聴いているひともいれば、作文しているワープロのキーを打つ音に神経を集中しているひとや部屋の外の鳥の鳴き声に耳を澄ましているひともいる。後者のひとたちにはBGMの音はほとんど聞こえていない。走る電車のなかにも、となりのひとと話していると、あるいは本を読んでいると、その轟音はほとんど耳に意入っていない。聴くというのは、こちら側からの選択行為でもあるのだ。

ひと話を聴くというのは、それ以外に聴くものがないように見えるが、じつはもっと選択的な行為である。相手が親しいひとなら、きちんとその言葉を受けとめていないと、「ちゃんと聴いてるの？」「聴く気はあるの？」と問いつめてくる。

「愛しないと見えないものがある」と言った哲学者がいる。「愛が認識を基礎づける」という言い方で、「愛しないと」という言い方がちょっと重すぎるとすれば、「相手に関心がないと」と言い換えてもよい。

聴かれるほうからすれば、相手がじぶんに関心があるのかどうかは、その聴き方ですぐにわかるものである。だからこちらの聴き方しだいで、愛されていると感じたり、じぶんのことなんかこのひとにとってはどうでもいいのだと感じたりもする。正確に、そして繊細に。だからこそ、対話においてはしばしば、語るほうが先に傷つくのである。逆の言い方をすると、聴くということが選択的な行為であるかぎり、それは何かを選んで聴くということであって、相手が伝えたいことをそっくりそのまま受け取るというのは、なかなかむずかしいものだ。そしてそこにじぶんが出る。何を聴くかというところに。

聴くというのは、相手の言葉をきちんと受けとめることである。理解できるかできないかは、ふつう思われているほど重要ではない。それより話すほうが「分かってもらえた」「言葉を受けとめてもらえた」と感じるほうが重要である。なぜなら、じぶん

について話すことは、じぶんを無防備にすることだからだ。逆に言えば、何でも話せるというのは、相手にじぶんが、いまのままで十分に、そして（もしあなたがこうしてくれるなら、といった）条件つきではなくそのまま受け容れられていると感じることだからである。「分かってもらえる」というのは、苦しみを「分かちもってもらえる」ということでもあるのだ。ちなみに西欧の言葉で、シンパシーというのは「苦しみを分かちもつ」という意味だ。

聴くことの力というのもそこにある。むかしある新聞で人生相談をしていた宇野千代さんが、いつも「あなたは～だと言うのですね」というフレーズを連発して、相談をもちかけるひとの言葉をほとんどそのまま反復するだけの「相談」をしていたが、その効果もそこにある。相手の苦しみをそれと認め、受け容れることは、それに同意することでも同感することでもない。心をひとつにするのでも、理解できるということでもなく、言葉をそのまま受けとめるということそのことに意味がある。聴くだけという受動的な行為がケアにおいてはもっとも深い力をもちうるのも、そういうわけである。

こころのケアやカウンセリングにおいて、慰めの言葉や助言よりも、「こうなんですね」と繰り返して確認することが大きな意味をもつのは、おそらく、そういう語りのなかで語るひと自身がみずからを整えるような「物語」を紡ぎだしていくことになるからである。聴くというのは相手の鏡になろうとすることでもある。その意味で、他者のケアとは、他者のセルフ・ケアをケアすることでもある。

語るひとは聴くひとを求めている。語ることで傷つくことがあるろうとも、それでもみずからを無防備なまま差しだそうとするのである。ケアにおいてそのリスクに応えうるのは、「関心をもたずにいられない」という聴くがわのきもちであろう。「だいじょうぶですか？」「なにかお手伝いできることはありますか？」。そういう関心が貫いてはじめて、ひとは他人を聴くということが可能になるのである。

ホスピタリティ、つまり歓待（＝他者を温かく迎えるとういこと）においては、聞き上手といった素質の問題ではなく、どのようにして他者に身を開いているかという、聴く者の態度や生き方が、つねに問われているのである。

（「聖教新聞」1999年8月24日朝刊）

II 聴くことの方

父がしばらく前まで、比較的重度の困難を抱え込まれたかたの多い老人保健施設で長くお世話になっていたこともあって、施設の様子を知らないほうではない。相談や見学で訪れた施設もずいぶんある。そしてそこに身を置いてはじめて知ったことがある。

あるとき、はっと気づいた。底がないといえいいのだろうか、食事時の深い静けさだ。同じテーブルのひとと何か話しながら食べてるひとがほとんどおられない。そもそも食べることへの関心をもたないひともしずかしくない。もっとも逆のケースもあって、食事外の時間は、同じホールがむしろかなりざわついているという印象を与えることもある。だれかれとなく、というか、だれに話しかけるでもなく、始終なにかしゃべっておられる。人数の割りには賑やかなのだ。

沈黙とざわめき。そんな両極端の空気にはじめはとまどった。が、しばらくして気づいたのは、交換と書くべきか交感と書くべきか、言葉のやりとりというものに乏しいということだった。他人への関心が失せている……ふとそんな感じがしたこともある。

まだほんの小さな輪でしかないが、傾聴ボランティアという活動が広がりつつある。病床の患者さん、特別養護老人ホームや在宅のお年寄りなどを訪ねて、そのひとたちの話に耳を傾ける、そういうボランティアの活動である。神奈川を中心に活動しておられる東海大学の村田久行さんに、以前、わたしが席を置いている大阪大学の臨床哲学研究室でお話をしていただいたことがあり、それに啓発されて大学院生らが最近、近くの老健施設に「傾聴」に行きはじめた。

だれだって、病気になったり、年老いて深い不安に襲われたりしたとき、いや元気なときだって苦しいときには、ひとに話を聴いてもらいたいものだ。答えがないような問い、どうにも解決のしようのない問題を抱え込んだときはとくにそうである。

「よりによってこのわたしがどうしてこんな病気に罹るはめになったか」「懸命に生きてきたのに、どうしてわたしばかりがこんなに苦しまなければならないのか」「わたしの人生はいったい何だったんだろう」「わたしが死ねばこの子はどうなるのか」「もう疲れはてた、休みたい」……。

ふだんこういった類のことばかり考えている哲学者だったら、そんな問いにもすこしはおつきあいできるかと、お話をうかがいに行きだしたのである。いや、別にそんな困難な問いをめぐってでなくてもいい。あの、沈黙とざわめきの場で、「わたし」と

「あなた」というかたちでの言葉のやりとりをわずかなりとも起こせたら、と。

でもその聴くというのが、なかなかむずかしい。ふだんの生活でもしばしば思い知らされることだが、傾聴ボランティアの現場では、なかなかうまく行かずにベソをかいたという泣き笑いの話がどっさりある。前にあれほどしゃべってくれたひとが次の日は口をぴたっと閉ざすということがあるし、そもそも口を開いていただくことじたいがひどくむずかしい。それはそうだろう。だれだってほんとに苦しいときは黙り込むもの。一日もはやくそれを忘れて楽になりたいのだから、思い出したくもない、話題にしてほしくないというのがほんとうのところだろう。

そんなこんなで、わたしたちの臨床哲学の演習では、昨年から「聴くことの力」というテーマで議論をつづけている。

哀しいとき、苦しいときに、ひとに話を聴いてもらってきもちが楽になる、というのはたしかにだれにもある。が、詰まっているもの、溜まっているものを吐き出したから楽になるのか、他人に語り、そして言葉を返してもらうなかでじぶんの哀しみ、苦しみをひとつの物語としてまとめ、そうしてじぶんにわずかなりとも距離がとれて楽になるのか、いざその理由を考えだすとなかなかむずかしい。

そしていい聴き手になるというのが、もっとむずかしい。聴くひとの質(たち)とといったものもあるだろうし、訊きすぎたり遠慮しすぎたり正面から受けとめすぎたりといった呼吸のむずかしさもある。

ひとはどんな場所で死にたいかと問う。病院か自宅か、娘の家か故郷か。でもそこでほんとうに問われているのは、じぶんがだれに看取られつつ死を迎えたいかということだろう。が、その「だれ」は家族とはかぎらない。ときに施設や病院のスタッフやボランティアのひとが家族よりもはるかにその「だれ」にふさわしいことがある。わたしは施設や病院でのわずかな経験のなかで、それを痛いまでに知った。

(「産経新聞」1999年6月7日夕刊)